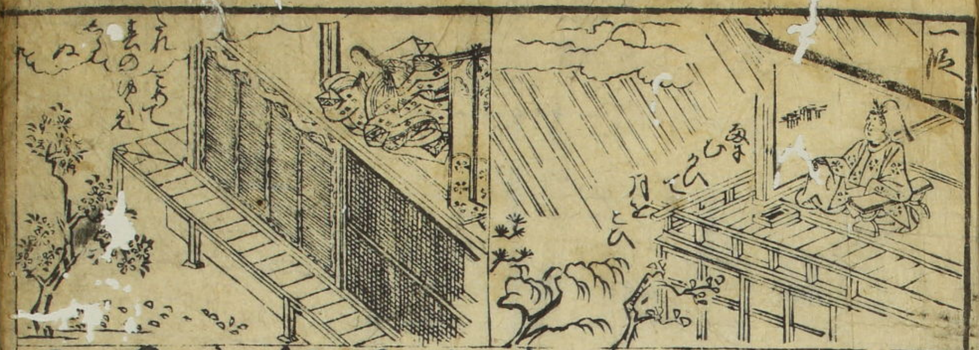
徒然草



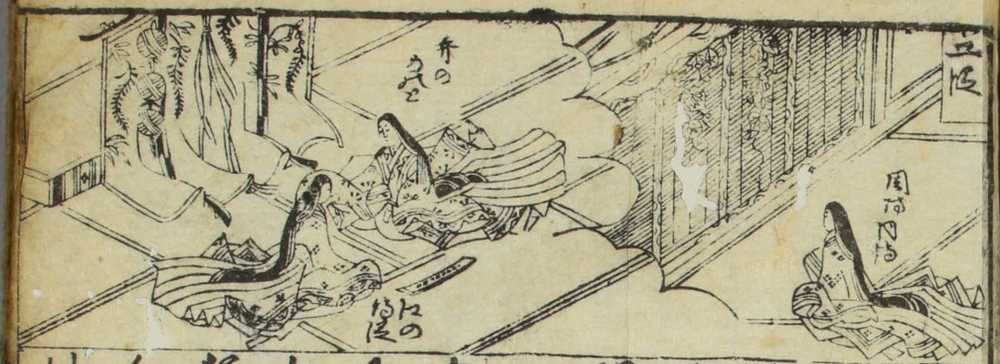
一段

花くさうりは月ハくまなきさとのとそんろ物うのあと
むろひて月ぬのひかあれこあて春乃ゆくゑふ
ぬをぞ紙あつまるはきかつ〜ぞ死ぬべうほどの物
ちりもやまでうろ庭などこそ人の物はまれ新乃
あとがさかをたかんよ海うまりあるぞやくちり
色まろれどうもはちろ牛まわりて海うでなどを
まろ花をみくといつるふ物とまろとろの物れろ
月のかつふくとまろうひうろとあれどぶとて
かうとあ海人ぐひ物の物ちりに分り今ハ人の
しをとハいあるぶ物れとを始ろこそおうをも
男女乃情をひとつよ変るとハいふ物うあいこや
とあうとうとを長ひあぐあ物とかとうぐあ物

と様あつて。こゝに髪みとゝのひやりあさちつが宿
ふひとつとゆづりそ。ゆこのむこいとあ。隆月の
こまのあるこゝに。ゆ里の外まで。なづめるこゝろも暁
ちりくなりてあるこのちわてるゞとんぬこゝろわ紙こゝる
やうまて。ぬこゝこゝの板ぬどゝゆんこゝゆるゞ水ぬ海
の新うち財ゆこゝるむこゝゆこゝ。ぬ海ごゝみゝく春
なり。雅ゆ米ちこゝかゝ。ゆこゝのぬまてこゝゆこゝゆる蒙の
うゝゆこゝこゝこゝゆこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ。ゆ
ゞゆこゝ知ゝゝこゝゆこゝ。ゆゞ。ゆこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
てこゝこゝゆこゝ。ゆこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ月の秋ゆ稲ゆこゝ
ちゆゞこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

いひてぞうすぎぬまぶ入ぞてんまこいひてとう
ぬぬぬぬとのこうんんとすぶ新八のゆしげ
あるの臨ていとこみどぞうくとあくあるぞえ
よたちぬんんううまうてぬぬぬあ〳〵もわよ
びからどぞりあくんんとるんもぞあのふこあく
蓑ちけしてあまあうさよぬしあまぬ新ぬて
する車ごとのゆうれとそれかまちどこひよ
すまぶ牛間下新をどのんうまるこあうくこも
ちこしくこもぞ面くよゆきうかんるもつまくな
らどぞうる新ぬあぬてあうぶう車ごもぞわあくあこね
ぬ〳〵もいぶうてうんんれとあくおれはりく
車こもれうぶうるうさこすこねまぶ笹てここを新

もうひめれまんよこびしげよりゆくこそ世ぶ
めもあひしらまて蓑ぬれ人踏んこるこそ祭あ
んうるあてなあまぶの橋蓑のおとぞら淫ふ
人のんうまるぶのあくあるふくもりぬ世乃人
教こさのこあひうぬよこそぶん皆う世ぶんのち
動ぶれぬぶこさふまこありうりこも淫あくまち
うまぬぶおりくさる蓑よあとのはそこ穴とあ
けうんまこうこるるもくるりとりぶこも淫こる面
あくりゆうぶやうこうぬぶ新の中ひありこ人ふか
ぶ貝あるぶうぶこど貝ふ一人二人のこあんやあ新淫
船蓑ぞうぬ淫ふあこくこ教ありる貝あれどくく
らぬ貝ふこぞれぶひうこめうりてうち蓑



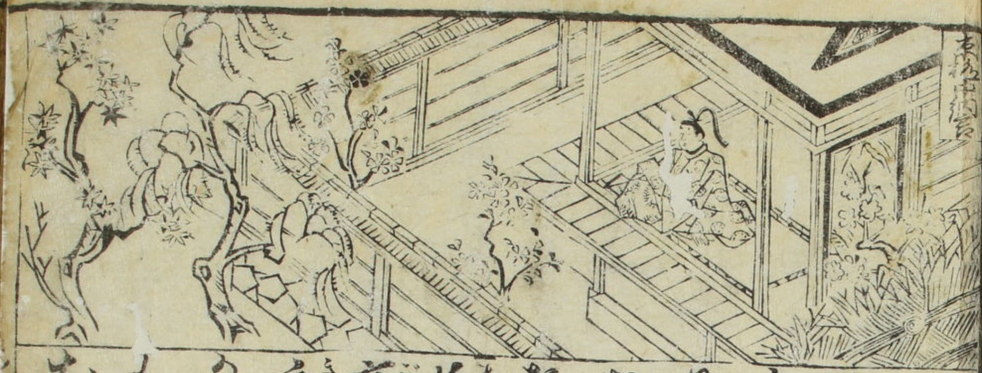
二役

三段

ありとうけたのまてをかくしたのこそわるけれかの
をくいてこりとのべこれ悔かのまろくとをもれ
月九月菊よりりくらくこいへばうぶの菊れ切り
まてをあくべきあ　そ枇杷宮太右宮うれ切て
後ぬる紀れ慢けうちよさうぬくををのうれこ
ゐうれるくれ見をとりをぬねをを紙ぞうけつ
と弁れのとのいくををのかあやめれ菊ありり
をくうとこぬのれ伝がこをみーぞう

三段

家のありたこまへ松こうを松八文ををこうーぬをを
ひとをうよしハ宝様へをうれ紙をのこをけう紙
ひとうぞ世よ地ひく成伝うをる長野れ紀元をを
くうみをひとくををこうわをへ八宝様へとをうの



物をりいとあちたく物ちけくりうう色をとををり
をんとそざくうみをとを海ーのをこうるうもむつ
う物をもうこうと紀物ひとくへをりうざこく慢こ
をもかこうをりくる紀物の匂ひをくあこうもこれ
をりーとそこる物ハ様ようれをひて見くとをり
ををこうれ様ようれをこうこうくりうしひとくへをうる
先これくちりこうくりくをりーとて京極八乃中納
言ををひとくへ物ぞをん紙をくうを色これりりる。
京物の屋の菊むこうさの今をこれりりりの紙みを
う紙月ぞうれりうかえでをくて百の花紀元
ををりてめくこををりりたちむろうこうれ
をハをりりをりこうをーをへ八宝様へをうこうぞ

なでしこ池のハ蓮はの葉落さもうつんだ
とこなつしぬぐちむろ海よりれりうかるるや。
つんごうさく黄菊をばさらどぬかいづきを
いとゑりかりばさやうるるさびをげうぬよ
ほつの世よまれるあ物ぢらめさ面ゥんて海へ
花よりんなれぬなどいとなつりかりばぬるるみ
をめづらくありがさき物ぬようぬ人ぬりて奥
ぢる物ぬさやうれ物なくてありをん

四段

分死しく賊ぬるハ船ぬりせざる男ぬよう
ぬ物ぬくりへとさしるをばるぬハんをを
めりんとしうなりしあるるぬしてはる海して白紙
しそえめなといをものとををて海よあるそひな

さ海あり。海ハ人れしとんぶび物あるハいるんうち
ゆうのづるべさ物ぬくてうなはざるんぬこそあ
ら段そ外ハ何をりるそぞあるまりさ

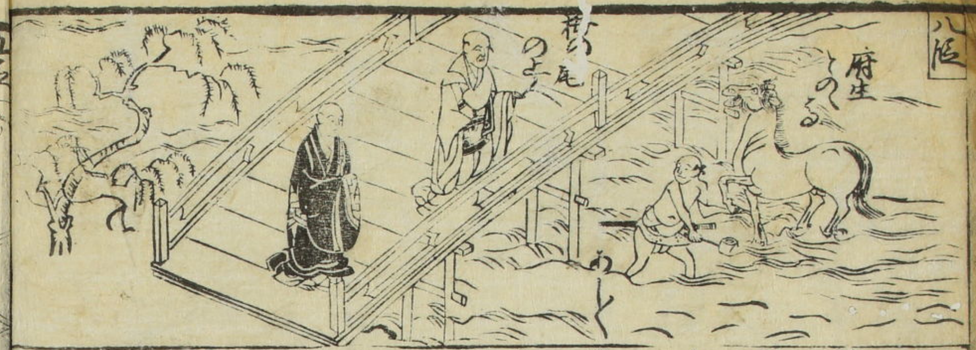
五段

鶴田院ハ尭蓮上人ハ俗姓ハ三浦れなめぢ。ところや。
さうるさ武者ありり。故ぬの人ハ馬ぬ物語を
そそぬぢまの人ぬうぬひつるとハあのるし。物ハ
人ハをとうあれさりよくて実ぬりといひしと答そ
迷ハさしそぬぢもうめざそその迷ハ物よひさしく
俗て女迷て人行るふ人ぬ海をれりさハひぬるび
ぬべんやるうふ物あるぬ人ハいハ物のるぬ者ぬけ
くいるびるてるようハびえいひそるるどんよくを
さうぬつハりをんさハ思ハるひごとりくうるるぬ

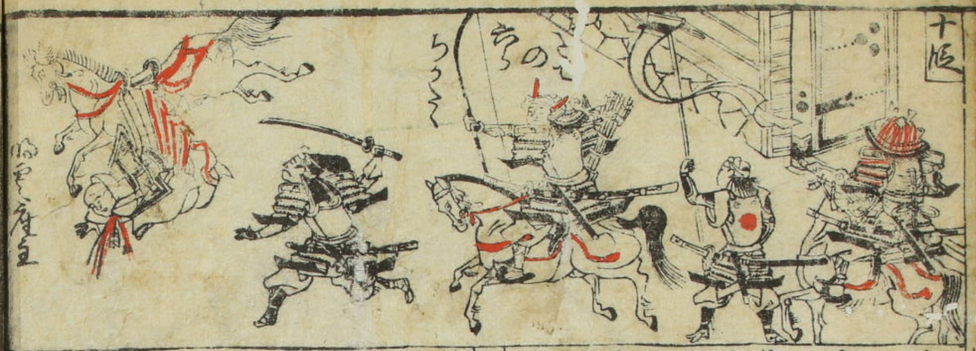
六段

のこわまこびとのづくりはとそらぬるゆりるべ。
あづまの人〻ぐがくるみれどぐぶとんぶ多くなるけ
とくれひとへはもぐくよりるるものをれば
いるといひてやこわぶぐらひゆこうをれぐ人はあ形くく
ぞうとなるくるまはーこそびをこ毛けゆぐみ。
あるくくもくくて聖義はのまやくるくとりぶを
ここまへどもやこ毛ひーよびーとこのほんあく
慶てあやうる弁はるこ恒指せくるくぶかくやくるぐ
あるこくるるてそ義をあるよーそこ見し他
六段
んをーとんゆるこのこぶくこ言へいぶこのこあるる
あくるびこの地そくーゆるるぐかくへよあひてぶを
へをしびやここひーよ独をくらはるくずこあくへ

そへはりあくれはこりあくーはるれふるぐ。
りくーあくんこいをはそくーぶゆへよそよくはけ
のあくまこはるひーくらくまこいひくりぶこあり
ぬべこくるゆこ悪ものたをくでぶくるりくーくよ義
悪ありをんや巻養のふるこ者をぶりくてこ
そ親のこはるひこくるるまこ世ここくてくるへの方
ふくるるこくるるるでくくるるひこの方ふ
こくくひ聖ふくくこをふくく分下にるひくてはへ義
こるりそこへのふふくりくはりくへはこくるる
かんぶものふあ言ふのくあふの能こくくくれ
ねこくくくーくるこくくりぶこくくまへ人こはふ
ぶるこくくのくくく



かゝぬやうよせとバ地こをへまゐりてさゝりゝ人つゝれ
餐なるさ河のつゝみれんゆ一人さるまりてぬとこゝ
世地ゝ海ゝどゝて凍餒のくるゝこわゝゞとうの若
あゆべゝゝどゝんとゝるゝしめ注とゆゝさゝめてゝそゝ
とつゝこゆりんゝゆゝ不使のゝまゞこゝそゝいゝゝてゝんゝどゆゝく
ひゞゝとゝゆゝゞゝの地ゝりはゝゆゝとゝゆゝとゝゆゝめゝ民ゝとゝゆ
で農ゝとゝすゝめゞゞゝに初ゝゝんゝゆゝゝゝゝゞひゝゝゞゝゞ
衣食ゝゝのゝゝゝゝ



十四段

ある人のまり結こつてくるあのとをいひろをぬをとしかはしたひろよ伝授をるより拾ひて死のあり元よ
よ長じぬる一言神のごとしと人ふりそいろあるの相ぞとんのとひろれぞらめて抱ぞりめて涙よ
のるとこのらーうのひ相伝ありさいろ
あやまりたるとそういひろる

十四段

的雲雀を相着よあひ拾ぐとのまりー兵法は鞠
やわるとあ拾られば相人海とを相拾ーあひ
とりいろある相ぞとを拾られば傷寒の拾をれ拾と
しのびまりぞ北山方めてうりあをかくありーより
てあづのあの竜をとでよをあぬこれさぞりとと
りありたるて矢よあるりてうを拾よりり

十五段

十二段

灸治あるあるあよりぬまぞ拾るりよりれありと
いふとちるくんのいひあをるあり格式ふをん
えびとろう

十二段

写山法方人方ふ灸をとろへてこ里をやうざれば
よ氣のるあり必ふうすべ

十二段

麻苺を鼻よあてくかぐべるびちのこ氏寄みて
鼻ふりへく脳をとむこいくり

十四段

紙ひたんとをるんへのくせぎるん程へのまりじいふ
へふをるを程ぞうちくくるくるひえてぞーかさ
らんこそぞとんふくからめをつのよいあれどかくいふ
人一義ををるひうるとあるいまぞ法国ろる
あるこりりよりまりるとてぞーるやうろ

ある酒どつきあくとをぎてくあーるむ人性その
貴あけまでどもとろるあつまびとぐりよせどて
をとをくれど憑能の角ーあまざるうりけてる
およてものの位よいてうり法たあ人よゆるとれて必ず
さうん紙うるあ中とのあれよてるとい人とを婚八
不憑乃ぎくもあるを中の能力をありをぎ連
どもを人みちのをとをそてあーしく見をはりして
教壇せざれど世乃ちう歩まて方人の師とあ法
事清たうるべうる
或人のいて年あ中にあるまでどてるおいてうぎ
うん藝をどをいべうあてげをあうあべを行素もを
充人のるをどんをうるどえをうどる流の海ーりくうも

あいあくみどるーあ能のちうざあやあて
ゆるくそあやをくあるまりくんれ世借れよとて
あづをうりて生涯とをすを下愚の人ゆゆくく
ゆびんをとあるあびをくをを毒をもうるを。
ればつうあくすーてやびーりをうりのぞむお
とあくーてやまんいんの一のまあり

十七段

西大寺静基上人腸がまり眉をろく誠よをて
あけうるあさ後ま上人腸裏へあのれうりあるを
周り周大信敬あるのあうとのをくをやとそ信仰
のをそくあをうれば資格あまをんてをびるを
あるみひとをやさまをりを行ーりよびく大の法まーく
充をうがひてもをけるをひうせてびまくんたう

とうくんてぃとて関東へまゐせられありけるとぞ

十七段 海道大網云へ乃めーとうまて武士をもうちう
こみくに六波羅へねとうくゆられ合戦一条ときとり
ゆて見とんてあるゆ海ひーせよあんとおかくこそ
何つとゆりくれとぞいとれける

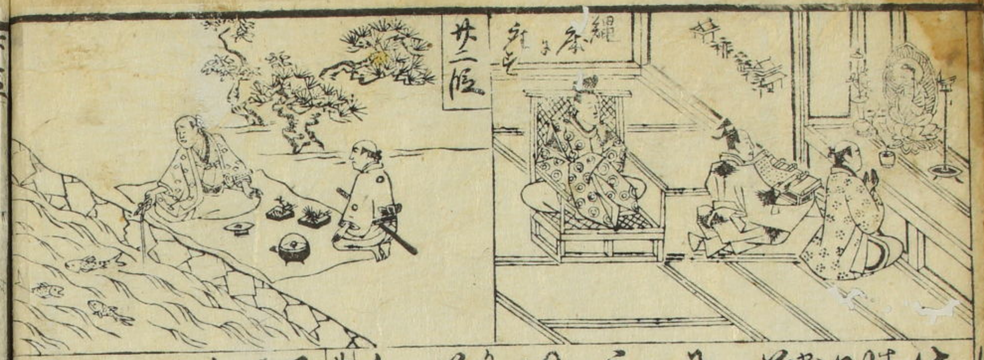
十八段 ぬ人あるの門よあやどりせられりけるよかくこそ
のごとれあつまりゆりるぐゆを見ものゆがこ
うちくんりてぃづくこを取ぐまとやうあるとんてぐ
ゆぐくよゆぐひるをこそせめこ尤もとるひれを
こをひとゆりより結るりとやぐてを奥はこそて
んゆていぶをくあぐくゆれぐゆぐをゆりあぐくし
かくぬゆよをぐとをひくゆりて後このるうゆ本

とゆのこてぐとゆうたせ物ある我りとあて関とよ
ろうぐーめつるゆ海ぐくるものとゆをとるありけ
つとと奥をくあぐ海ぐくれぐ海ようくらまくろまを
海ゆとてくれよゆりぐをもあゆべくるゆり

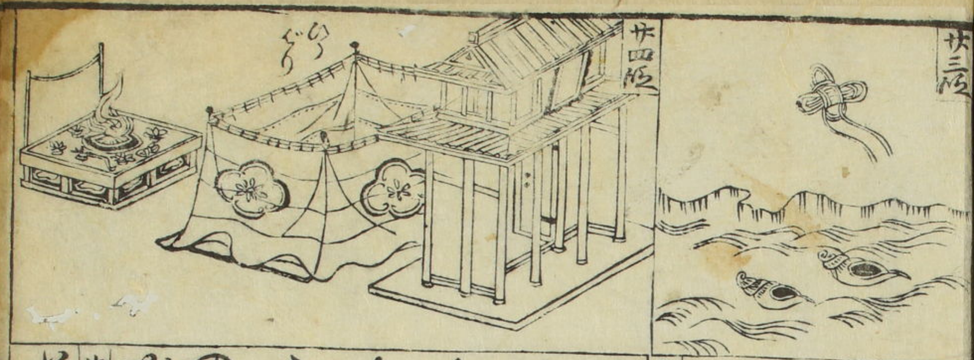
十九段 世よゆるぐくんくゆ先横橋とゆろべーはいぐあくこ
まゆくんゆ耳ゆをくろひゆもゆぐひくぐをくゆ
らぐをゆうれゆりゆーとゆくろえべくこ個寝とう
けをようこゆあるくゆの横橋とくぐぐついであくと
てゆひくとゆ生信実減のくうくうる海とれくるゆ
くゆけくゆゆくゆをゆぐりゆぐゆぐゆぐとをくぐを
ゆくぐぐくゆよゆをとゆひゆくゆめくゆくれぐ主ゆ結
ゆつまて恐くくーとゆんくとゆうんくとゆの横橋て我

いとをかしうこそとぶらひもまで
ものしたりけれ
春はあけぼの
夏は夜
秋は夕暮
冬はつとめて
雪の降りたるは言ふべきにもあらず
霜の白きも言ふまでもなし
火などを急ぎおこすもいとつきづきしく
昼になりて
ぬるくもゆるがもてわろし

二十段
大内の大会のさうぶ
のるもの
宮内卿
内裏
仙洞
廿一段
廿二段

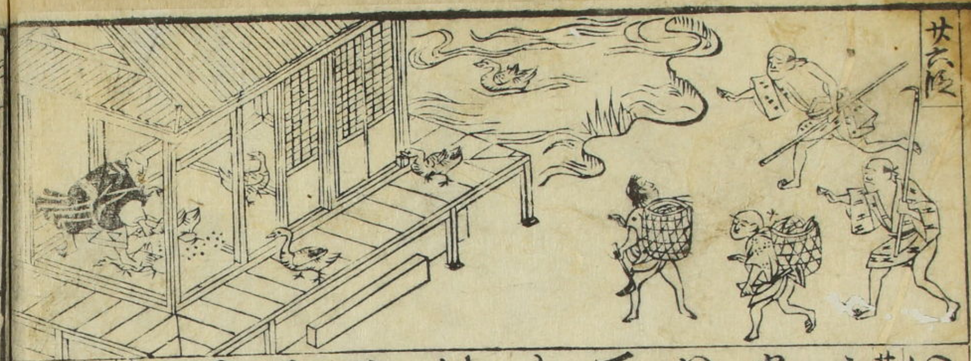


仏文をひろめ給ふ事ましまさばをもんやうを
則御ゆるしの益あり。ふさうふ地をうばとる。仏
前よりみて。をとり強をとらべれてゐるうち
ゆをも若業をのづから侍せうき。数礼のゆるう
を縄庵より嘆をば地ゐしをして強完るべ事
捨りをとり二ゆうをうをゆ拘りそむうをしゆ間地
心熟をもゆて不信といふべうしゆをこれ式



廿二段
亀のうををとうるゆいうゆ拘うをゆ人の
たづひを世話しゆ凝者とゆ他ゆうこにとう
うるをとうるうゆいんをゆ伝ゆうゆあうう
ど奥乃をり添をとのうをてはのつををうるゆをす

くなりとそ物わせうまて
廿三段
みゆむをびとのゆ弟式拘びうをひうるゆ嫌を
いゆ貝ゆ仏ゆうをびゆをあうゆんどをゆをうん仏
廿四段
らをををゆをといふをあやまりゆり
門ゆ額ゆかうる式ゆうけとのゆうけうをゆ和ゆ
拘の二和種ゆゆ額ゆうるとのうをゆひをゆ見ゆ拘式
数ゆうををうゆうをゆうをゆ不ゆうをゆ常ゆ
事地をゆ式ゆをゆゆうるゆをゆいゆゆ護摩ゆをゆ
ををうゆ侍ゆをゆ護摩ゆをゆいゆ仏法ゆ法
ゆの字ゆをゆをゆていゆゆ天ゆ侍ゆりていゆを清水寺
侍ゆ式ゆ拘れゆ当ゆ
廿五段
花のさうゆ美ゆ式ゆ五ゆより百ゆ五十日ゆを世ゆの後七日ゆ



廿六段

いのごとき事ども七十余日ありやうたりけり

廿七段 遍照寺の承仕法師池の鵜を目ろうひつたて堂のうちまでえをまさぐて戸ひきあけられぬ数をもつてさいなんしてあてさらんにてこころゝやすからひ物どもつくしくすえたるをあるもの法師ども出てこれをつぎ

廿七段 村のおとこどもたちてゆるさんとてめきあつる中に法師まつまてうちふせ物ちころしたねとひ法師ときこえてやうす使庭へおりてまたりあるとこれをたすけさせて持の獄ぬらまこりり暴後大鷲の前よりゆんはるる

廿七段 太衝の太郎字鹿うりびとといふる浴湯のとき

ぐ相論よりのちつゝ有りのうちつゝ有りの合平ゲ自分のたりの父のうちにて主一寺る御記を取開白義よりこの点うちくるを書ありとき

廿八段 世の人あひあつ河ぢづくを盗もるとよ。

必ず禁ぬこと。ときてふ物ちくゝ盗の使世るの浮沈人の是相自他ちあよ共物ちく得もてくゆ。らまをとる河ぢひれつ盗

のるりといふるをもつて

廿九段 あのまの人は那の人は海ぢつり。那の人は合妻ふゆさそ方をもてよかるゆ共をもれわる弘家の僧をとて我俗よあらびてへはま

つまるんくる

人間のいとなみ我わるふ善の因ふ言
仏と仰りてそんあめふ金銀珠玉ぞろりといと
ゐこ豊塔をつくそんとするよ仏ぞうまへと
まちてよく無量しそんやへの教ありとみつ
ほどこ下りぞうぞ無おとくあるうち
おいとゐこ油のつと基物り

世一段

乃ちよあめさうへおらぬなのひしるよのぞん
ておつまるそうなら油ばらぶかくよそふん活じ
物とといひんゆをふるるつひれとゐれとよふと
ろく見る地ぞうぬみられうらひくぞわしぶるる
うらやまりやどちあうぶさりんとのひさあり
ゐん我智武とりあてんよあらそふ法のあるる

りのく法のとそうそうけ宗あるものゆ牙とかこいる
びあびひゆりんとうてい善よあとうどゆとゆう
そうぞる武法とび他よ油さるるれあるる大なる
失ゆり品のたりさみそこ戈藏ゆとそれ油
ゆそこ先祖のわるれあくもへよ油さまりゆこ
ゆるへたとひとはよあてこういとひごこ問ん心
ゆそこむくれとうありぼくしこて是とうすりび
をとるゆこんへんのこいひれるうひとこゆよ
んひあびゆ楊んゆりゆりるよこ油ちとびぬる人
ゆびうるあこうふゆこ推とるゆへよんごけと
ゆこてびてばかるよあよ油ちるるゆ

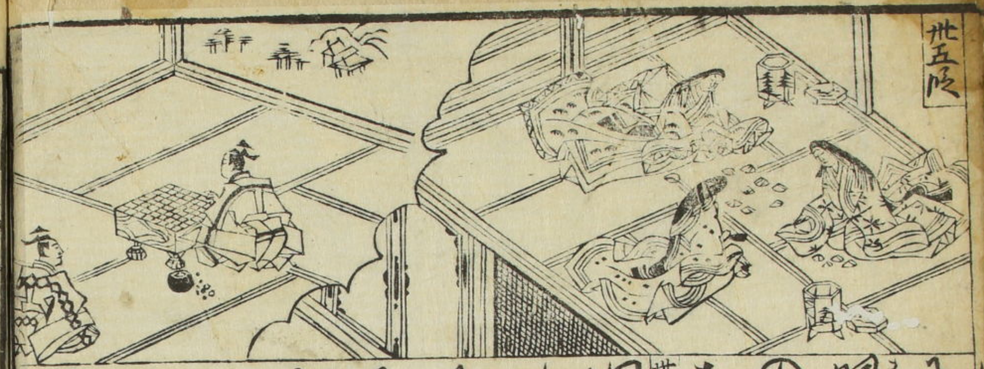
世二段

年充るへの一事ひをこれるゆれあこてびへの

ひちまん雅ちうこうんをといとるくゝ花のくこうご
めでいあるもいてづうるひさゝあまこそもこもも
もてれあるあのあさゝ二ほひままそんねるりこと
ほさあくんゆゝ今ゝうまもこまありこいひてあんゝ
大まゝりうりとこもそどろよいひちうもとゝさづう
ほれまあるうぬあもとさこえもものづうあやゆ
まもあぬべゝゝさどうゆもまさまゝちうびあどこ
いひうゝ狂まこもとんみちりあるどこも場ゑ
ぬべゝゝりてちうぬるまもてりどゆふあもあゝく
りどこあぬくもあうぬゝのいひさうするもゝさこも
あうずとあひあどうゝもてゆるいもうまひゝ

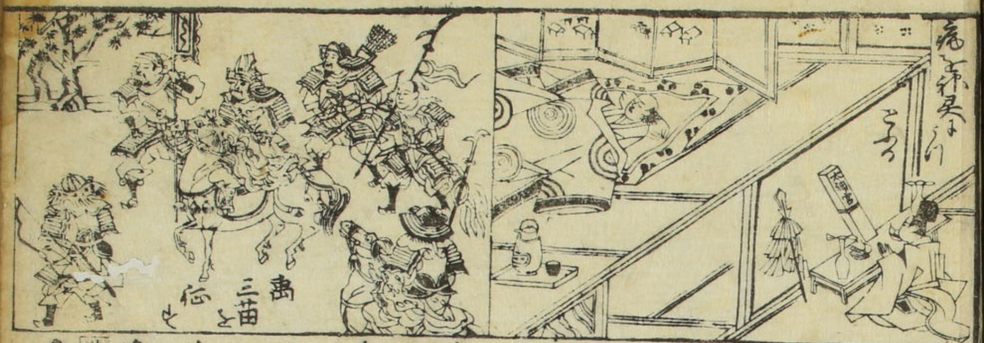
何事の式といふる浅漬漬ゝ代ゆゝでいゝさどり

あり代ゆゝさ程ゝりいふ詞ゆりとゝんゝ戸伊ゝふ。
建礼門院の右京大夫源の雅院ゝ御位のうち
みうちどこうゝ人ゆるゝ我いふよ世の式もゝりり
あるゝとあるゝさふをとうゝさゝり
けいうるゆあゝてゝんのどり程くいゝうゝねるゝ。
用ありて行ゝりうゝもゝゝとゝてゆびゝくゆゝ。
久ゝくあるいゝもむゝゝんとむうひゝうれどおゝとび
ゆゝく方もゝてゝびまゝんを錆ゆゝうゝ方のゆゝと。
さゝりて河ゝとうゝをゝゆゝどひゝゝあ益ゆゝいゝとい
げゆいゝんゝうゝゝゝゝゝあるゝあるゝんゝ行ゆ
ゆゝくゝをゝゝをゝいひゝてんゆゝゝんゝゝむうゝゆ
しくゝうんゝんのゝゝまゝゝゝゝゝ



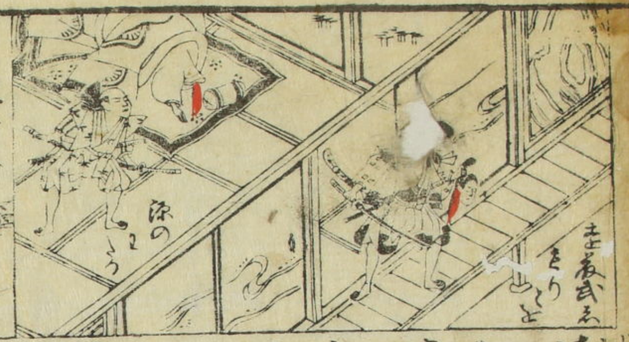
ふるどいとんぱひうぐでりめあうざるど流儀のまうき
眼鏡をあるぐさうるぱそそくあうさぱんのありて
のどにはりはりしてゆりはるばしよみ文もんあ雪え
さぱひべるどなりいひをこせてうるぱいとうまま

貝とありんんの鉢あまるどべをこそうそとんさ
してんの袖めびげひざのちまでめとんどるは
よおるるどべんよはりもれねうくるりんんぱうそ迄
まりあくとるとんみぐてちてきづうりあるん
やうあれどありくあるぱうなり。長盤のをこいれ
とあてくちくんよむうひあるるをとまりてと
んあうてびあるるをとをとうくみくあるひど
るあどずぐふちびけうあてうるれ心あうるる美



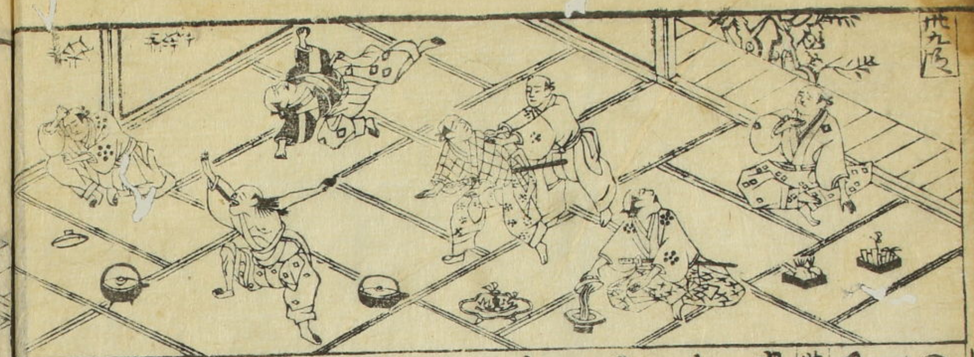
のるぱよむうてあべうばばあてうりとあべし
くとべし清水公びあとびよぬまを行して義経
をうとあとあれというり世とありうみちもかく
やはんうちとうしまびかうくりうきまくふ
してみびりあまびばゆうるうずそむくは始て
ちうりとをりとせばよあてうり温泉湯して病を
神妙ようるぱ。ちうるんなりこ醫書よい
ねるびとり目のまんなるんの世とあるあるなど
ちうばとるあびしくせびを化ととくあびまてんよ
とちうびる地獄の極こそ三蓋と極をうしぱく
さをとりて法とちうくよいちうびりき

うちう河ぱ血流うちよあちりぱんあようびれく。

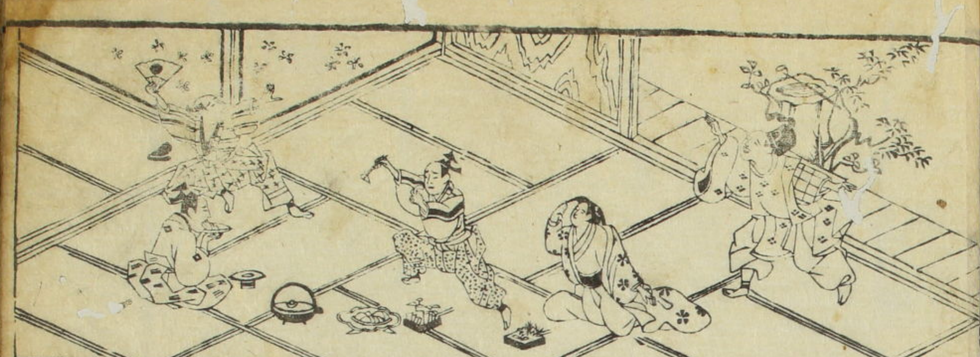


情欲堪りがたきあやまちをしてくやみとなる。猿
どもらむるふかうの仇ぞ。義経とものこと
はのやうに見えとて、若のあるとよろこぶ
んさうりふてあるとわらそひつの仇ぞうやこ
而目をよせぐまくばかりよめやうに情よめぐ行とい
さぐごとくして百ひれ方とあやまり義とうしな
るる。孫ぐつくまくあれやくくかうん
まをあらぐとけるかうふんひとてなぐこせぐこ
つまとともなる。光とあやまいとうこの事を
ざるり光ぬるへ情祇ところおりくあるそうは
て感じうぐ而ぬんものづくまづくまぐ義
益ものぐなるぐ分とたとけて結ぐんかぐひ

なるうんと成堪りがたく貴のぐるこ時よ海されるる
事。ぐるてかくこちの祇ぐるはまされるぐごと
廿七版
小野小町ぐまぐるうめてさぐるぐびおとろへ
さ海のぐ生ぐさつのぐ文よみしぐぐ文清行ぐかくり
こいへ祇あまどぐうる智大師の直伝の因縁よりの
大師八義和のもぐでめよかくまあり。小町ぐさくり
なるるぐさ海のるるまや祇堪りくる。
廿八版
小町のようさ太へあくはくひねまぐ小書ぐ海
くなくこいぐ太へつくぐとくるくとくり。滅よ事
人事堪りくる中よぐとたのしむより義係ふれ
なるぐ。見実乃太事也ぐこべぐとぐこておまよん
ざんへのづまこれりぐをくれざんなみるぐ



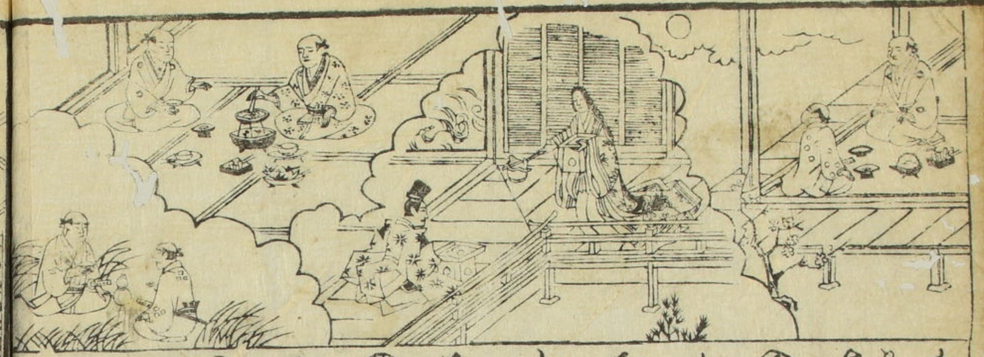
いとあまんあるうなる人とりてをかーとうさ犬
りんまとそとうんんや
世うまいんえぬとこのおりさまりぎをあるどこゆい
まり酒戒をあてまるのものをてるを奥こすると
こいうあるゆんとをんえどのむんのうかいてえ
かーけよ眉をひそめんめをとりてをてんさー。
みがんとするをこうてひきこめてどころよの
ませつまだうりりこんをぬちまれよ粗人こぬて
をこげまーく愚鈍なる人ものまんよ大まれ病
着とかりてお酒をまちどたのまこふを祝ふをき
日あどこ酒やりかりぬべーあるるまで祝いて。
拍子ぶかるひ生をでそんやうはて皆の



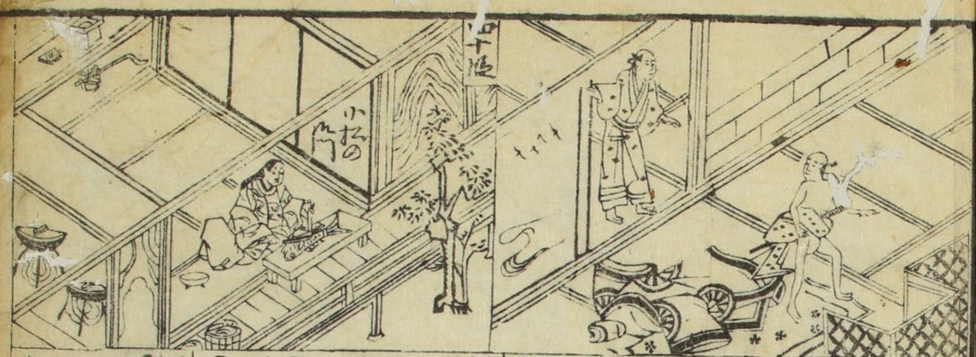
あをあがしど拍子やけうこうれたまをかうて
ぎづーひとあるぷんとてうるめをんをるるぷ義
祝をあく礼義ゆをそむりりぐうれにあひ
あるんん鈴てくは地ーと思いざるんやんれまかる
あるーひあこがりとぷまるよあうさんまるてうえん
をてあるんんおやーくぬーぎよあがしぬべーんの
よるのてんるうぬよんしぷひんるうぬよんふく
ーとみーんをぷるんあるくるひのくまりぷるとば
拍子ぷがうしゆぐこぷひををづーぷをだかくうばー
うういあさ気ん間ごろれんもあがしどぷいむ
ふひごこまるうふかさゆまごゆごびん新
ちさげて打ちるひ盃りるるんん礼ーるぷよから

ぬんかうをうてほよさうをあてさづくをくひさ
ゐさあのかをたれかうさんをひまひを
えさうを法師めしくをうをひまひを
かくぬさて目をあてくれどすぐりくるとを
ゐんるんさうとあくあてかるうをゐをいく
じきまさをかくをいひさうせゐるゐ神
ゐさかをのんかりあひさうひてゐを法
ゐをうしかさくふうさるのさみてかてゆ
ゐさゐぬをさをやうそうて縁ゐりゐちる車ゐを
ゐてゐやゐちつゐをものくぬさうかゐをよ
ろかひををそをるひちつ水ゐどをむさんん
もいんぬゐ見をちしかゐえけさうゐをる法師の

小者がくるをあるをてゐえぬゐ見いいつくうゐあ死
くゐるかをうゐゆかゐをとをてもかかをを法のかを
義ゐるかさうをるゐいるかかいかかゐをゐ
ゐりく賊をうをひ病をもうく百姓の出をゐ
いんど百の病ゐ酒をりうゐをこれうゐ人をゐるを
ゐ角をかひをるゐ人をうゐゐうをををひゐく
ゐくゐる法の世ゐ人れ智恵をしゐひ義をゐ
くをかゐをくくをて恵をゐくうゐかの形式
ゐりてゐ地獄ゐよゐ酒をえをく人ゐのゐをくゐ
人ゐ百生をるゐかゐるゐをゐゐ生るをゐをゐ法
ゐゐるゐをかくうをゐ酒をゐをゐれかをのをくを
てをくをゐりをゐをゐかゐ月ゐ義をゐをゐ



のとめてもんぜどうふの後はしく番茶にする方の
奥とそろるまぶやつまつくざる日ものかに友の
へさそごりをるひあいきんをぐさむしをまて
しかるぬるりめみものうらうりばでごれこれ
ものどのをうあるをひてさーをされるいさよ
しをせむをあまてやまてあいりなどてなごそて
おさごちりむうひておかくのこたるいとおろびて
のうりなぼのまぶるどあくばうるおのなごいひて
むむのよのてのこるをあういてういさむんばるる
らまてどこてたこるもいとよのさんのろさ
さて公ひさいうをとあーなどのくまるせるあるも
うまをづる海りんのよ戸あてびしくをれ

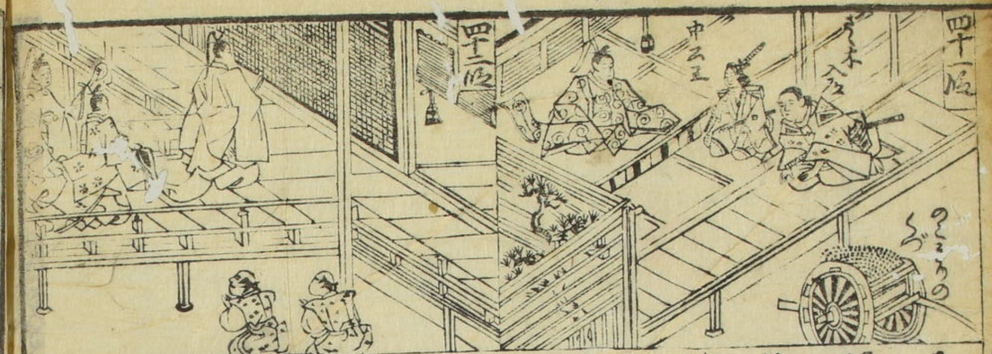


ねるえうまてーさいいどよ戸へ勢ーとうこゆるさ
ゆくめこ解くてびまさあるーうるあとまよ
ひさあをるふまどひさかまてるかあうう。
かそ乳のどるまさーおをさあどいる粉。
ひさーうひくまるがひどうすぐこれけうるもお
ひるかそこぐれ行ーしくはきくー

四十五
黒戸ふぶ松沖門信よはのせるて肴ーあーはあい
まーー河海されるせをを結ーとーるとでばーよ
いとあるせ結ーうるーりみーうまあるをければ。

四十六
黒戸とのーとぐ

四十七
通倉沖書をめくれ鞠ーうーるよ。あーりて浸。
いるぐ意のうーうぐりけまいーぐせんとたーこあげる



四十一段

四十二段

四十三段

ぬぎ捨て未源波分のこぎ下りぬべと車に法をて。
掛くまりたりたんぶ遊ぶまうまて法ぬれりぐら
ひまりまりぞりくあたん用ぎみぐーと。歳
じあうりりぎるもとあるものかりりしあ。
右面中級言のぐりきをぐ周言やはりける
このあひりりぐとぐーかりきいりぐとふひあり
のこぎりぬぐぐいやくとやうぬるこ遊級まり
とりんぐりきすおごとまりりるぬ放実りそぐ

四十二段

或ものさみりひども問信所の法那まとんて人
りかりりとて実飯とべそんぐりち法りるぐどふ
とりてりちりる女房ぬりのあ殿ぬりあ。
喜れ屋のれ飯りそこあれと思べやりよりひりし

四十三段

一さん経

たりりのりりぬれ

有摺厳
紅
僧

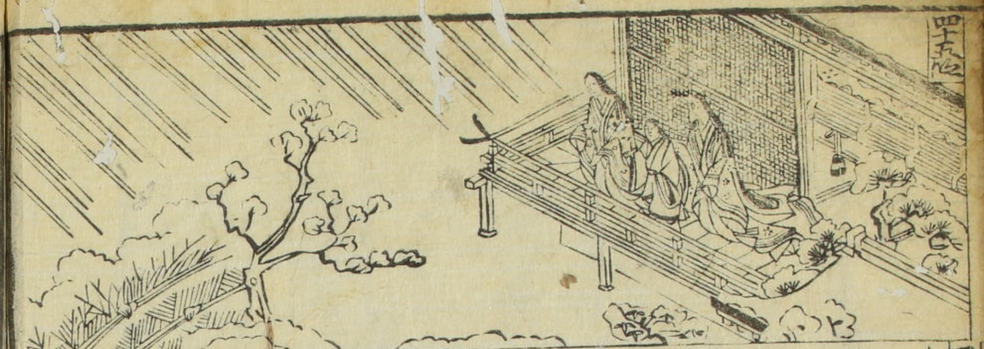
えげん
上人

四十四段

りんどう寺

四十三段

りんりりりそのんぬりき法信りりけりりりや
家の法門道眼上人一切種と称まりりくぬ波経
のりりりりけりりとりりりりりまりりりりりりりり
厳種と僧りりく那厳法りりりりりりりり



四十五段

四十六段

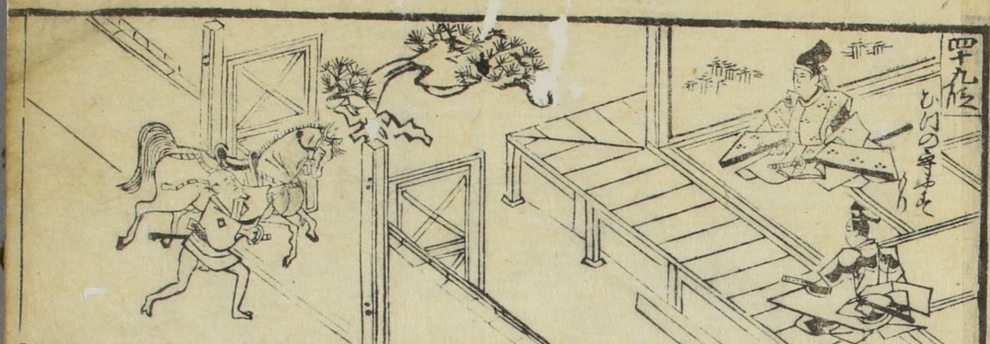
四条大納言

四十七段

四十八段

四十八

ひりんぺいどろうかくあやをくぶ
ぐるーんやとかさ
もくごとりくんとこ
かくてあべきあ
ゆるるゆぞとぞ
くあるとりぞ
せいたるいとありぐこかりあり。
世とおきひろたぬ俵物ばりくに女性あれども殿人
のんよかりぞ不とあり山道のんとるそそを
たまたる嫌よくでんるあるくぐりけっとぞ
四十九 坂濱奥守泰盛ひりの寺まを
とひきあさせたるぬぬるるるるるとそろくてぬるをゆるる
とこあるとんてぬ見いるあるるるりとて鍛冶屋



四十九 ひりの寺まを

させぬりぬあるくとのべさぬるるるかけあてぬまぬ
見いあるぬくくてあやあちあるべるそのくぐりけ
つたとるくぐべんくりあそれるんや
五十 清面ぬるるるるかりあるるどんるるるるる。
人のらるあくそくべくるべるるるを
べあるくみるるるるるるるるるるるるるるるを
くるわくてぬべるるあるるるるるるるるるるるるる
るるるるあくべるるるるるるるるるるるるるるる
ざるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
五十一 るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

このひとりからぬ義絶の法師のこふわらべおや
うるの振舞ゑんづるひもおろはてゝ〳〵めるゝ得ん
かゝ〳〵ゆゑこゝみ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

あるの中よりのぼる海さうごうをひらてゝ第一
のと銭囊ゝ実てゝ其外に品ひとそく一まとをき
ひべゝ一目乃中一刻れうちゆをゆきてれとの
そてゝてん中にとこうてゝ蓋乃ゆきてんとをいと
ゆをてゝをゆとだうちとてゝ大まといそぐ海きこ
ゆのゆとをとてゝじをふはさりりてゝ二まもゆ
あべゝだゝてゝ碁をうゆ人をいてゝうゆをべ
人はきだちてゝゆとをとて大はさくゝごとゝそれ
はとりて三乃ゆをとてゝ十れゆはうゆあとゆを
十をとをてゝ十一はさくゝゆゝてゝひとゆりをき
まさうひりてゝへうゆくべを銭十までをりれ
べゆゝくゆゆゝてゝれゆはくまをてゝねゆはうゆゝ